



# 植柳の風

八代市立植柳小学校 校長室便り  
平成30年11月12日NO. 114

## 食べ物は 自然と人間をつなぐ

いずかし交流給食が、本校厳櫃の森で行われている。1年生と6年生、2年生と5年生が、森の中で、昨年秀岳館高校から寄贈いただいたベンチでいっしょに給食を食べる機会は、一年に一度の貴重な機会である。笑顔で食べている子どもたちの様子を見ると、自然の中で食べることで給食の美味しさも増し、色づき始めた銀杏の木や「清明の池」の鯉たちを眺めながら食べる植柳の子どもたちは恵まれているなあとしみじみと思う。今日は、地域の方たちを招いての3、4年生のいずかし交流給食。これまでコマ回しや風呂敷学習など、いろいろお世話になってきた地域の方たちとの会食で、どんな会話が弾むか楽しみである。



5日(月)、午後から八代ハーモニーホールで開催された八代市学校給食研究発表大会に出席した。その中の講演会で、農と自然の研究所代表で農学博士の宇根 豊氏のお話を伺った。宇根氏は、冒頭、次のような質問を立て続けに私たちに問いかけられた。

「食べ物がどこでとれたものだろうかと気にするのはなぜですか。」

「人間も、自然の一員であるという考えに賛成ですか。」

「自然という言葉は、明治時代に英語の Nature の訳語として造られた言葉ですが、どうして、それまでの日本に『自然』という言葉はなかったのでしょうか。」

なかなか難しいテーマで、すぐに答えが浮かばないものばかりだった。

宇根氏によると、「自然」という言葉は、日本に二回輸入されたそうで、一回目は、恐らく邪馬台国の時代に中国からもたらされたと言われ、「自然にそうなった、自然な関係」など、人為が加わっていない、ありのままの状態の意味がある。この「自然」という概念は、のちの鎌倉時代以降、仏教の影響で人々に広がり、おのずからなるがままに生きることが理想とする考えが普及した。

二度目の輸入は、明治維新の時期。英語の Nature を訳する言葉として「自然」という言葉が造語されたようだ。この意味としては、

「自然界」や、人間を表現するときの「本質」「性質」「天性」など多くの意味がある。



宇根氏は語る。農業の本質は、単なる食糧生産ではなく、人間も生き物の一員として、天地自然の中で生きていることであると。食べものは、もとは命を持った生き物だったし、その生き物を食べることは、その生き物が育った天地自然とつながることであり、天地自然とつながるといことは、人間(自分)も、また天地自然の生き物であることを実感することには他ならない。私たちが、いずかし交流給食で味わう美味しさは、本来、私たちが食することの意味、天地自然の中で生きていることを実感する心地よさを味わっているからかもしれないと思いながら、講演後、宇根氏の本を数冊買いこんで、今、読書にふけっている。